恵佑会札幌

肝胆膵外科開設1年経過

リスク高い領域でロボット支援手術

札幌市白石区の恵佑会札幌病院（高橋宏明理事長、久須美貴哉院長・229床）は、2025年4月に肝胆膵外科を立ち上げた。中核を担うのが、ロボット支援手術の豊富な経験を持つ森本守肝胆膵外科部長だ。開設とともに着任してから約1年、診療体制の整備と症例の積み重ねを経て、同外科は着実に存在感を高めている。

森本守部長

森本部長は名古屋市立大を01年に卒業後、同大外科に所属し、関連病院で研鑽を積んできた。キャリア初期に出会った腹腔鏡手術のパイオニアの存在が、その後の進路を決定づけたという。

「術後の回復が明らかに良い。これからは低侵襲手術の時代だと直感した」と振り返る。

当時はまだ開腹手術が主流で、腹腔鏡に対する懐疑的な声もあった。しかし現在では、腹腔鏡手術は標準的な術式として広く普及している。

次のステップとして登場したのがロボット支援手術ダビンチだ。大学院修了後、臨床に戻るタイミングで、所属する大学医局がロボット手術推進の方針が打ち出し、その最前線に立つこととなった。

ダビンチ手術の最大の特徴は、高精細な3D視野と繊細な操作性にある。

「肉眼よりも緻密な解剖構造が認識できる。これまでの手術方法より精密な手術を行うことができる点が最大のメリット」。

特に肝臓や膵臓の手術は、血管や臓器が複雑に絡み合う高難度領域。従来は大きく切開する必要があったが、ロボット手術では数ミリの創で対応可能となった。肝臓手術では、肋骨を切除したり開胸が必要なケースもあり、患者の負担は大きかったが、ロボット支援手術では8ミリ程度の創が数カ所で済む。

「より精度の高い手術が可能であり、術後の立ち上がりが明らかに違う。患者さんの表情も全く違う」と開腹手術との差を強調する。

一方、肝胆膵領域におけるロボット支援手術は、全国的にもまだ限られた施設でしか実施されていない。

「リスクの高い領域なので、導入に慎重な施設が多いのが現状」と説明する。

森本部長は、300例以上のロボット支援手術経験を持ち、国内でも有数の症例数を誇る。25年の現職着任後、肝胆膵外科は着実に症例数を伸ばしている。手術開始から半年で肝臓手術は約30例、膵臓手術は約20例実施。26年になってからはさらに増加しており、年間換算では倍以上のペースとなっている。

肝胆膵領域におけるロボット支援手術は、全国的にもまだ限られる

多くは紹介患者で、道内各地から来院。手術困難とされた症例のセカンドオピニオンとして訪れるケースも少なくない。

「最後の砦のような役割も担えれば」と、高齢・高リスク症例に対しても、慎重な判断のもと手術を実施し、患者や家族の期待に応えている。

保険適用外高度手術にも挑戦

同病院では、同外科のほか、泌尿器科の体制強化などもあって、ダビンチのニーズが急増。3台目を導入し、消化器外科・呼吸器外科・耳鼻科・泌尿器科・婦人科で活用する体制を整えた。民間病院で1施設3台体制は国内でも珍しい。

26年度診療報酬改定において、ロボット支援手術の年間実施件数が200症例以上の高度急性期病院では、対象の悪性腫瘍手術等で1万5000点が算定できる。同病院の年間ロボット手術件数は590件ほどで全国でも症例数の多い病院の一つであり、今後、同加算が病院経営に大きく寄与することが期待される。

数多くの手術を行う中で、保険適用外の高度手術にも積極的に取り組んでいる。血管合併切除を伴う膵癌手術、肝門部胆管癌手術など、すでに複数症例を実施しており、今後は「成績の安定化」が課題だという。

森本部長は、「疾患構造に変化が見られている」と指摘する。肝臓ではB・C型肝炎由来の肝がんは減少しているものの、脂肪肝由来や転移性肝がんが増加している。膵臓では、食生活の欧米化や糖尿病の影響で、がんが増加傾向となっており、今後もニーズは確実に増える領域という。

一方で、同外科は人手が必要な領域であり、若手医師がまだ少ない。高難度手術を継続的に提供するためには、次世代の育成が不可欠。森本部長はロボット支援手術プロクター（指導者）の資格を有していることもあり、同病院で経験を積み、資格取得を目指せる環境づくりを進めたい考えだ。